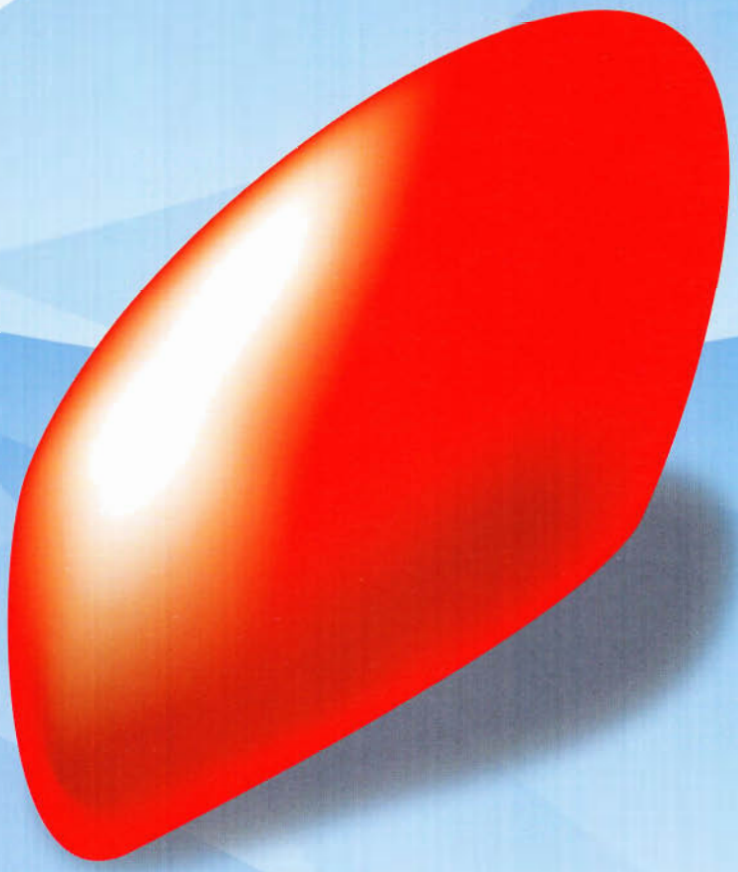
地域経済

REGIONAL ECONOMY



第16号
2012.7

目　　次

理事長のごあいさつ

新たな年度を迎えて―2 年目のご挨拶― 1

特集

「まちなか再生戦略 WS 事業」から「まちなか再生活動」へ 3

紹介記事

大学と地域―協同の仕組みの構築と可能性 8

平成 23 年度事業報告

「和歌山市まちづくり戦略研究会」中間報告 12

「和歌山市交通まちづくり研究会」終了報告 15

平成 24 年度事業 17

理事メンバー 19

研究成果一覧 20

理事長のごあいさつ

新たな年度を迎えて—2 年目のご挨拶—

和歌山地域経済研究機構
理事長　遠 藤　　史
【和歌山大学経済学部長】

昨年の 4 月に和歌山大学経済学部長に任命され、さらに本機構の理事長も拝命することになりましてから、早くも 1 年が経ちました。この間、本機構の皆様方、さらに和歌山の地域経済を様々な立場において担っておられる皆様方と、様々な会議や会合を通じて、実り豊かな対話を重ねる機会を持つことができましたことを嬉しく思います。

和歌山地域経済研究機構は、和歌山商工会議所、和歌山社会経済研究所そして和歌山大学経済学部の三者によって平成 8 年 7 月に創設されて以来、和歌山の地域経済を活性化するための、地域に根ざしたシンクタンク的機能を担う機関として順調な発展をとげてきました。私自身は地域経済研究の専門家ではありませんが、本機構の理事長を拝命するという貴重な機会を通じて、和歌山という地域に暮らし、地域の発展を希求する立場から、専門家集団たる本機構とその願いを共有しつつこの 1 年を皆様方と共に歩むことができたことを得難い経験と考えています。昨年度に引き続き今年度も、微力ながら皆様の研究活動を最大限の力をもって支えていく所存です。

振り返ってみますと昨年（2011 年）は、3 月に東日本大震災という未曽有の大災害に襲われたのみならず、ここ紀伊半島でも 9 月初旬、南部を中心に台風による風水害・土砂災害が襲う重大な事態に見舞われ、自然の猛威を改めて思い知らされた 1 年でした。またこのような災害に伴って地域コミュニティに脅威を与えかねない様々な問題が発生するに至ったことは周知の事実です。しかしながらその半面、このような重大な局面を経験した人々の心の中で、地域復興支援の動きなどを通じ、今までは忘却していたかに思われた地域、そして地域コミュニティの重要性が、真に実感されるに至ったこともまた事実だと思います。様々な報道機関の行ったインタビューなどから見ても、地域の重要性が人々の心の中で、昨年ほど強く再認識された年はないように思われます。

この機会をとらえるならば、我らが和歌山地域経済研究機構もまた、専門家集団たるその能力を生かして、人々が心の中で今、強く希求している地域という存在を支えていくべく、専門的な視点に立った体系的な調査・研究を積み上げつつ、地域の発展にますます貢献していくことを求められることになるでしょう。今年度より新たに立ち上がった研究プロジェクト等を通じて、現在までに蓄積された調査・研究の諸成果も生かしながら、地域に対する更なる活性化の提案を行っていく責務が我々にはあるのだと考えます。

昨年の就任のご挨拶で私は、和歌山という地域が閉じた地域ではなく、他の地域との様々な相互関係を有することを述べさせていただきました。そしてグローバル化が進む

今日の世界を視野に入れるなら、グローバルな潮流とローカルな状況との響き合いに注目することもまた必要であろうと指摘いたしました。体系的な調査・研究はともすれば自分たちの扱う狭い範囲に考察を限定しがちな傾きがありますが、おそらくここに加えるべきは、いささかの想像力をもって、その範囲を敢えて超えようとする意欲ではないかと思います。昨年度のご挨拶でも提案いたしましたが、この意味では、国内外における「うまくいっている」地域経済や、「賑わっている」中心市街地との対照研究も、本機構の研究に新たな視点を提供してくれる可能性があります。

そのささやかな例をあげるならば、昨年の秋、ほんの偶然の機会でしたが、経済学部の足立教授が関わっておられるイギリスの小さな街の活性化の試みを拝見することができました。そこは決して特別な観光資源に恵まれているような場所ではなく、ごく普通のイギリスの街と思われましたが、その小さな街の中心市街地活性化に積極的に取り組んでおられる地元の人々にお会いし、親しく話をさせていただいた中で実感したのは、「この人々の思いが、そしてこの人々のエネルギーと想像力が、現実に街を活気ある場所に変えてきたのだ」ということでした。ある人は商店街から、別の人は博物館から、また別の人はコミュニティ FM 放送から、様々な専門知識を駆使して街を活気づけ、人々を様々な活性化策に参加させてきたのです。そこに私は、国や地域は違っても、同様の問題を考え、同様の問題を解決しようと取り組む人々との、ある種の共通点、敢えていうならば共感のようなものを感じました。

豊かな自然、豊かな文化と伝統、そして歴史に裏付けられた幅広い地域経済を持ったこの和歌山という地域に対し、和歌山地域経済研究機構が今後、その諸活動を通じて、そして想像力をもって、一層の貢献をなすことを願ってやみません。

特集

「まちなか再生戦略 WS 事業」から「まちなか再生活動」へ

NPO 法人市民の力わかやま
理事　糀　谷　　昭　治

平成 23 年度ふるさと雇用再生特別基金活用事業に、「まちなか再生戦略 WS（ワークショップ）事業」として、採択された。平成 23 年 9 月から 3 月まで取り組んできた事業の概要から、新しくスタートする「わかやまイイネ！プロジェクト」による「まちなか再生活動」までを報告する。

■まちなか再生戦略 WS の目的

空ビル・空店・空家・空き地などが急激に増加し、虫食い状態で存在する「空洞化した和歌山市中心市街地（まちなか）再生の重要性」を WS 参加者全員で共有し、魅力的な“和歌山のまちの顔”をいかにして作り直していくかということを、理念から現場まで根本にかえって、すぐにできることだけに流れず、骨太なしかも大きな変化を起こす方策を検討し提言する。そして、平成 24 年度からのアクションプランを策定して実行フェーズに移ることを目指すと共に、この WS を通じて「まちづくり人材」の育成を図る。

■これまでの経緯

和歌山市では平成 10 年度「第一次中心市街地活性化基本計画」を策定し、翌年に TMO「(株）ぶらくり」を設立して中心市街地活性化を 4 年間進めてきたが、57 事業中 11 事業の実施に留まった。平成 16 年度に WS を実施⇒市民の意見を反映した基本計画に改訂、事業推進を強化して 32 事業中 13 事業を実施し、合わせて 89 事業中、実施できた事業は 24 事業と実施率 27%に過ぎない状況であった。

そこで国の方針変更に則り平成 18 年度からは、推進の主体を TMO から中心市街地活性化協議会に移し、「第二次中心市街地活性化基本計画」を策定、平成 19 年度から、約 60 の事業に取り組んできて、この平成 24 年 3 月で終了した。この事業の実施率は内容を別にすれば約 95%で、「フォルテワジマ」や「けやき ONE」などが生まれ、一定の成果は得られたが、中心部の衰退に歯止めがかかったとは言えない状況にある。今後の急激な人口減少と高齢化の進展を考えると、「中心市街地活性化（まちなか再生）の重要性」はますます高まってきている。

■現状と課題、検討の方向

1. 人口減少と高齢化（2030 年には人口 30 万人を切り、内高齢者 10 万人超⇒税収が半分になる大変な事態）が急速に進む今後の和歌山市を考えて行く上で、コンパクトで持

続可能な都市の形成が不可欠であり、市と市民、地域住民が一緒になって考え、「まちなか再生（コンパクトシティ）」の方向に、思い切った政策の舵を早急に切る必要がある。

2. 中心市街地におけるビルや商店などの集積が、「100 万人商圏」という時代のニーズに合わせて無秩序に広がってきたため、まち全体にメリハリのない均質な空間になっていた中で、商圏が激減した結果、空ビル・空店・空家・空地（駐車場）が逆に無秩序に市街地に広がって、中心市街地の空間は更に魅力を失ってきた。
3. 第一・二次中心市街地活性化基本計画で策定した約 90 の事業を実施したにもかかわらず、中心部の再生には明るい兆しが見えてこない。
4. これらの状況を建て直すには、これまでの手法の延長上に解決方法を期待せず、視点を大きく変える必要がある。⇒単なる空店対策のような活動ではなく、「まちの中心」を決め、そこに新店舗・新サービスなどの魅力的な集積を新たに創り出すような視点、即ち、「今のまちなか」に「コンパクトで魅力的な集積＝新しいまち」を創るような方向を目指した。

■戦略 WS の実施

1. 進め方のポイント

（1）「計画段階から徹底的な議論をして『目標・計画・計画実行方法＆体制』などの合意形成を市と住民で図ること」

（2）「熱意と行動力のある人が『事業担当』を引き受けて実行していくこと」

（3）「事業推進のマネジメントを適切に実施すること」

（4）「体験、発見など感覚的な要素を大切にする“まちなか再生の原則”を重ねていくこと」

（5）「100％共有はありえないが、キチンと納得しながら進めること」

2. WS 実施の体制と内容

（1）奥村プロジェクトコーディネーター・高橋顧問の指導を受け、プロジェクトマネージャー・ファシリテーター6 名を含むスタッフ 9 名、WS 参加者（36 名⇒最終 22 名）の体制で 20 回実施。

（2）各回 WS の内容（表 1）

「まちの中心の重要性」の共有＆キチンと納得しながら進めることを重視して進めたため、「今を知る＆中心の重要性・条件を考える⇒候補地の選定」に 2/3 を費やすことになった。

従って、「将来を構想する＆実現に向けたプロセスを考える」については時間が足りず構想段階に留まった。

（3）WS の結果・成果

① 中心の定義

・人と情報が集まり賑わいのある、市民の誇りとなる場所

② 中心の 7 つの条件

・和歌山の独自性を随所に感じる“文化”があること

・様々な価値観を受け止める“多様性”に富んでいること

・まちに奥行きをもたらす“セミラチス構造”（「表−裏−奥」を感じさせる街路構成）を備えていること

・優れたデザインで構成されている“居心地の良い空間”があること

・都市における“質の高いライフスタイル”を実現できること

・“安心・安全・利便”の交通体系により、ゆったりと歩けること

・生き生きとした変化を生み出す“連続的な投資”があること

③ まちなか再生ケーススタディのための「中心の候補地」の絞り込み

第 13 回「まちのわ」WS で、11 の候補地があがっている状態から、4 グループに分かれて自由に中心地のイメージ図を書きながら、中

表 1 まちなか再生戦略 WS の内容

	月日	テーマ	主な内容
	0 9/16	WS の組立を考える作戦会議	・メンバー構成、内容構成 ・スケジュール など
今を知る→中心の重要性を種々の角度から考える→中心の定義と条件を考え候補地を選択	1 10/11	・中心市街地活性化の経緯 ・中心市街地の重要性共有	・目的の共有 ・まちの中心とは？
	2 10/25	他都市で考えてみる	・まちの中心とは？ ・他都市に住んだ経験？
	3 10/29	現地で考える（創造の端緒は発見にある）	・ストックとは何か？ ・潜在的ストックを発見
	4 11/8	地図を使ってみる	・歴史的な地図から中心候補点を探す
	5 11/15	まちの中心の意義・重要性を再度自由に考えた	・様々な視点から考える ・経緯も大切にする
	6 11/29	まちの中心を歴史的に考える⇒まちの中心の再考	・中心地の成立ちを勉強：和歌山市博物館館長
	7 12/13	空間の魅力化を考える“30 年後の和歌山のまちの顔”	・イメージを描く ・地図を使って考える
	8 12/17	候補地を絞り込むために再度、現地で考える	・現実を見て、現実に囚われず可能性に焦点を当てる
	9 12/20	イメージを膨らます：候補地を言葉で表現、絵で描く	・空間的な魅力 ・使われ方の魅力 ・時を超えた魅力 ・主体別の魅力
	10 1/10	中心地の重要性・定義を再考、視察準備	
	11 1/14	実際に行ってみる ・丸亀商店街視察	・先進事例を見学。 ・話を聞くことが重要で成功の本質を感得する。
	12 1/24	視察を振り返り⇒“まちの中心の定義と条件”再確認	
	13 1/31	今までの WS の振り返る⇒中心地定義・条件を再考⇒中心候補地を再考	2 グループから初めて上ってきたぶらくり丁を含め 12 ケーススタディ候補地となった ⇒4 グループがそれぞれ中心地域を想定した将来像を発表⇒4 候補地に！
将来構想＆実現に向けて	14 2/7	まちの中心 4 候補地（ケーススタディ地）を決定⇒その地域の将来像を物語風に描くことを開始	
	15 2/14		
	16 2/21	将来像を物語風に描くプロセスデザインを開始	20 年間の道筋を考える
	17 3/6	プロセスデザイン Ⅰ	各ケーススタディ中心地の将来像に至るプロセス
	18 3/13	プロセスデザイン Ⅱ	中心地が決まるまでのプロセス
	3/25	最終報告会	（於）みんなの学校

心候補地を選んだ結果、ぶらくり丁が復活して中心候補地は 4 地域になった。

④ ケーススタディ：中心候補地 4 地域の将来像を構想

・ ぶらくり丁界隈：北ブラくり丁とぶらくり丁間の駐車場を公園にし、露地で繋ぐ。この公園や露地には魅力的な小店舗などが集積するエリアとして発展・・・・・

・ 内川周辺：内川へ向いた商店、川床料亭、植栽、カヌー、楽しいイベント・・・・・

・ けやき大通り：和歌山県自生植物の森にする。この森の中に和歌山らしい店の展開など・・・・・

・ 城前：伏虎中学校（建替要否は検討中）を活用、ここを中心としたまちなかの賑わい創出・・・・・

⑤ 将来像を実現するプロセス（行動計画）を構想

・ 中心地が決まるまでのプロセス＆中心地が決まってから将来像が実現するまでのプロセス ⇒主として以下のためのプロセス（行動計画）を構想した。

・ 市民が、「まちなか再生が重要で必要だ」と思う気運を醸成させること。

・ 「まちの中心を担う！」と覚悟を決め、活動を開始する地域が現れること。

⑥ 上記成果をまとめ、事業報告会を開催して報告、報告書をまとめて H23 年度事業を終了した。

■今年度 4 月から 6 月のフォロー活動

「アクションプラン策定＆実行体制の確立」を、引き続き事業フォローとして行った。

（1）4・5 月の追加 WS（4/19、5/18、5/31）を実施、アクションプランの策定を目指した。

・世論醸成戦略チーム　・イベント検証戦略チーム　・情報発信戦略チーム

3 チームの WS で検討した。進めるべき重要な 6 項目を選ぶところまで進んだ。

（2）6/11、6/20、6/26 とコアメンバー会議を実施、基本活動方向・アクションプランを整理した。

■「わかやまイイネ！プロジェクト」が、新しい「まちなか再生活動」をスタート

7/6 に全体会議で下記の新しい活動の目的・アクションプランを承認、8/10 に「わかやまイイネ！プロジェクト」として、8/10 第 1 回全体会議を開き、具体的な「まちなか再生活動」をスタートさせる。そして、和歌山市「まちなか再生会議」や本機構の研究会などと連携して「まちなか再生」を進めていく。

1．目的：「和歌山を幸福度日本一の住み良いまちすること」を目的とする。

我々はこのために、和歌山の「まちなか」を「人と情報が集まり賑わいのある、市民の誇りとなる場所」とするために活動する。

2．基本的な活動方針（楽しく、おしゃれに）

（1）和歌山いいね！運動を広げる。

（2）「まちなか再生」の必要性＆重要性をＰＲ⇒気運醸成⇒市民運動化していく。

3．当面の具体的な活動（表 2）

表 2　アクションプラン

No	項目	内　容	担当･期限
1	発信すべき情報まとめ （1）基盤情報	コンパクトシティ・中心の重要性を発信するため調査・まとめ（将来も含めた地域別人口推移・地価推移など）	～10/30
	（2）「まちのわ成果」	「まちのわ成果」など	～8/10
	（3）地元説明用資料	成果＆基盤情報・新活動内容の地元への説明会用資料	～10/30
2	わかやまイイネ！運動	具体的な活動方法を明確化⇒活動開始	8/10～
3	イベント分析	賑わい創出に活用出来るイベント探索 ・まちなかで開催のイベント案内は、年度末まで継続 ・工夫や連携で賑わい創出に効果があるイベント、一工夫で調査やデータ収集等ができるイベントをリストアップ	順次報告し 最終 3/31
4	まちづくりサロン	・二火会（1000 人会と協働） ・協力店（スイッチなど 3 店くらい） ⇒二火会を協力候補店で 3 か月に 1 回くらい実施	継続 順次
5	情報発信 ・紙情報､IT ツール､ラジオ､テレビ等メディア MIX	ブログ⇒名前が決まってから ＨＰ⇒9 月くらいか ・わかやまイベントボード、ニュース・ハーバーなどの活用も考える（主宰者と調整要） ・目標月日を決め、大大的に発信	～7/20 ～9/30
6	具体的な活動	やりたい人がやりたいことを企画⇒仲間を集める。例えば、 ・掃除や清掃 ・焼きそば ・ステッカー ・ぶんだらに連をつくって参加 ・県の市街地緑化事業に参加	7/10～ 企画開始
	他の団体･個人への PR ⇒入会勧誘や連携	・相互に講演等の機会を持ったらどうかなど、それぞれが参加している他の団体で PR⇒連携 ・地元説明会	7/10～ 11/1～

紹介記事

大学と地域—協同の仕組みの構築と可能性

～　ゼミナール活動による実践　～

和歌山大学経済学部
教授　鈴　木　　裕　範

大学は、そして大学人であるわたしは、地域のなかで、地域とともに何ができるか。この数年間、学生たちとその可能性を求めて、取り組んできた。主なフィールドは、和歌山県南部、いわゆる熊野地域である。その活動をとおして見えてきたことを述べてみたい。

それは、近畿で一番小さな村から始まった

わたしたちのゼミが、実験場に選んだ最初のフィールドは、北山村であった。60 歳代の女性 4 人による、奥熊野・北山郷のジビエ（鳥獣料理）と山菜を主体にした家庭料理レストラン「かからの食の店」が開店するころだった。村の地域資源調査に協力し、学生の目線で北山村の宝物を探し、村の食文化にも光を当てた。村特産のじゃばらの収穫時期には、ボランティア・アルバイト—労働は無給・宿泊交通・食事代は村当局が負担するという取り決めで 3 年間つづいた。

北山村へは、わたしが初めて訪れたときに比べて、格段に便利になった。当時、北山村への道は、国道 42 号を南下し三重県熊野市から行くか、奈良県五条市から国道 169 号を経て行くほかはなかった。所要時間は約 5 時間、現在は 3 時間ほどで和歌山県から国道 169 号で行くことが可能になった。1980 年代当初、当時の村長が「命の道」と呼んだ国道は、交通不便の是正に役立ったが、過疎化と高齢化は歯止めがかからない。人口は 500 人余り、高齢化率は 40%を超す。しかも、国道の開通でつながり、熊野川河口の町・新宮市と村内で一番近くなった集落の小松地区から、人口減が始まり、限界集落化してきた。

4 人で始まった「かからの食の店」のオーナー兼料理人は、現在 1 人だけになったが、料理は奥熊野の伝統と最新の料理を組み合わせた食のフュージョンによって、新たな価値を生み出し続けている。じゃばらと唐辛子、味噌を材料に「じゃばら胡椒」が生まれ、東京のデザイナーが協力してしゃれたデザインの「じゃばらジュース」がつくられている。いま、学生と村の交流は途絶えたが、村で展開されるさまざまな連携と交流は、当時学生やわたしがチャートで示したことと変

北山村でのワークショップ

わらない。村にはNPOも設立された。

調査・提案型から「協同」の実験へ

東牟婁郡那智勝浦町太田は、那智連峰を源とする太田川流域にある 10 の集落の総称である。コメを中心とした農業が、暮らしを支えてきた。昭和の、懐かしい農村の風景がいまも残っている。しかし、緑の水田のいっぽうで、耕作されないまま雑草が生い茂った耕作放棄地や休耕田が増え続けている。人口の減少、農業の担い手の高齢化、若者が人生の設計図を描くことができない農村。熊野の農村・太田は、だれがこの国の農業を守り、農村の景観を保全しているのか、という根源的な問いを発している。

2010 年 5 月、その太田地区で農家有志の組織である「太田地おこし会」と協同で休耕田の利活用モデルの研究を目的に、1.6 反（16 アール）の 2 枚の休耕田を借りてコメ作りを始めた。田植えは、12 人の学生のほぼ全員が初体験であった。7 月には田の草取りをし、稲刈りは、9 月初めに行なった。シカや虫による被害にあったものの、350 キロほどのコメを収穫した。精米したコメは、農家の協力を得ながら、イベントなどの会場で学生たちが販売し、完売した。

翌 2011 年は 1 反の休耕田を耕作し、8 月下旬に刈り取った。しかし、収穫したコメを保管してもらっていた農家の乾燥機が 9 月初めの台風で水没し、収穫はゼロとなった。2012 年 4 月 27 日、1 反の田で苗を植えた。学生は替わったが、3 年目のコメ作りが行なわれている。

この取り組みを、わたしたちは「太田米プロジェクト」と呼んでいる。学生が農村と協同することで、地域のなかに新たな種を蒔くことはできないか。学生の農作業のいっぽうで U ターン男性の子息が都市生活を捨てて父親のふるさとで農業をはじめ、県農業大学校の関係者が支援に参加、地元の食材を地域活性化に、という女性たちの取り組みが始まりつつある。地域づくりの傍観者から地域コミュニティの主体へ、住民の間にわずかだが、意識が変化する兆しがみられる。ただ、行政や調査研究機関のプランに乗っている面もうかがえる。地域力を喚起し、ブラッシュアップし、地域のなかに再生の知と経験をストックする仕組みづくりが求められ、主体性の確立が重要になっている。

那智勝浦町太田で田植え 2012 年 4 月

コメ作りが教える「宝物」

いっぽう、学生たちはコメ作りをとおして―それはささやかな体験ではあるが―食の現

場である農村、農業が直面しているすがたをしり、自然とともに生きる村の時間と文化を学んでいる。昼は労働、夜は聞き取り。その成果は村の今昔と 365 日の暮らしを記録する『太田・むらの生活と文化誌～太田川流域に生きる人びと～』（A4 版　68 ページ）という民俗報告書にまとめた。いまも生きる「むらの生活・文化」、そこには人としての生きる知恵と技術があふれている。暮らしのヒントをそこに見る 100 部印刷した報告書は地元紙の報道などで地域内外にしられることになり、多くの人たちからぜひ読みたいという希望が相次いだ。

大学院生と学部生の 2 人の女性が修士論文・卒業論文で太田をモデルに農村と若者の連携交流などについて取りあげた。地域の人びとの傍らに立つことで、見えてくる真実がある。それは、この国の農業政策の光と陰である。休耕田・耕作放棄地の増大は、熊野の緑と青き水がつくる農村景観の危機であり、全国各地の農村が直面している現実である。地域社会の基盤であるコミュニティ力は、人口減・少子高齢化によって、低下しつつある。しかし、農村、農業をめぐる厳しい環境下で、農家の人たちは決してうつむいて生きているばかりではないのだ、ということも。農業もいいなあ、今春卒業した女子学生の言葉である。太田地区で活動を始めて 3 回目の夏を迎えた。

聞き取り調査から始める商店街での連携

2012 年 6 月新宮市の仲之町商店街で商店を訪問し、店の歴史と経営、店と商店街の将来についてヒアリングをした。熊野地方最大の商店街で、仲之町に店を構えることはかつて商店主の夢であり、誇りであった。しかし、地域経済を支えてきた林業・製材業の低迷、郊外型大規模店の開店などにより、新宮市でも市街地の空洞化が進む。かつて繁栄の象徴だった商店街はシャッターを下ろした店が目立つ。現在営業している店は 50 店余り、そのうちの約 4 割、20 店を訪問した。聞き取りの結果は報告書にまとめ、それにもとづき学生と商店主による、商店街再生プランの検討を構想している。

いろいろな取り組み　しかし人通りは少ない

あらゆる答が現場にある。学生が行動するとき

あらゆる答が現場にある。フィールドワークの必要性を問う学生たちに、わたしはこう答える。かつて、ロスアンゼルス五輪を取材した作家沢木耕太郎は、ジャーナリストには現場への渇望感がある、とその著書に書いた。わたしたちは、ジャーナリストではないけれど、その時、その場所にいたい。みずからの目で、耳で確かめ、自分なりの答えを探し

たい。信頼できるのは自分による一次情報、そのためにはみずからの五感を研ぎすます必要がある。現場に謙虚であるとき、歩いた距離は人を裏切らない。その最初の一歩を踏み出すかどうかだ。学生が楽しみながら行動を起こすには、好奇心の扉を開くインセンティブが必要である。

仲之町商店街の乾物店で

フィールドは、どうしていつも遠い場所なのか。これも学生がしばしば発する問いである。和歌山市から約 200 キロ、自動車でも特急でも約 3 時間、多くのものが行きたがらない「辺境」だからこそ、やりたいではないか。だれもやりたがらない、からこそ意味がある。

学生と地域住民が価値を共有し合い、連携と交流の仕組みを構築していく。地域住民と学生が協同でつくりあげていく地元学は、その一手法である。わたしたちのゼミナールを主体とした地域づくりの実践は、さらに進化することが求められているが、自主と自律、互恵の精神を大切に、地域に学び、地域とともにあるゼミ活動は、地域再生への道を開く可能性をもっている。さあ、フィールドに出よう。

平成 23 年度事業報告

「和歌山市まちづくり戦略研究会」中間報告

研究会主査　木　下　　雅　夫
【(財)和歌山社会経済研究所　常務理事】

1. 研究の背景及び目的

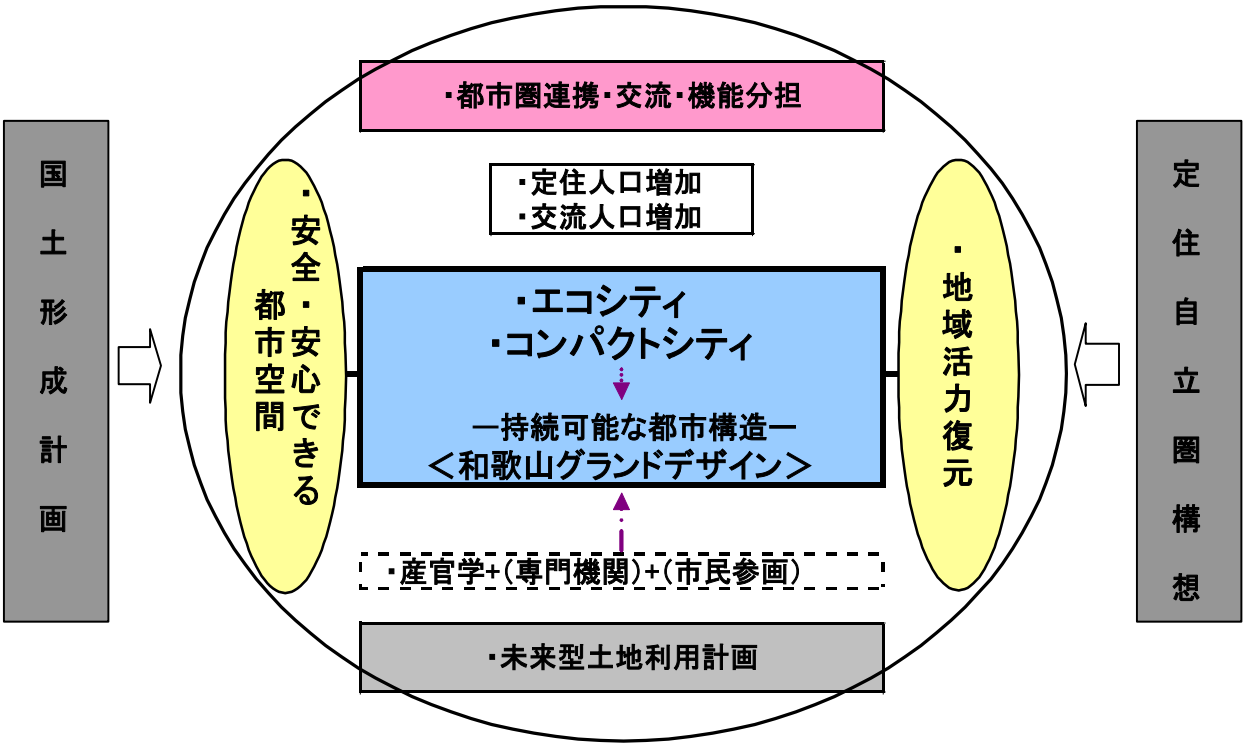
和歌山県では近いうちに発生するであろう「東南海・南海大地震」による災害が予想される中、被害を最小限にとどめ「安全で安心できる生活空間」の確保・構築が改めて議論されている。さらに、将来に向けてのまちづくりの重要な要素でもある、社会インフラの整備や財政負担、産業構造や人口構造のトレンド、ライフスタイルの変化などもカバーしたグランドデザイン的な都市計画づくりが必要とされている。マクロ的にとらえれば、社会構造の枠組みの大きな変化にどう対応していくかということといえよう。さらに、ミクロ的には各地域の立地特性に応じたさまざまな固有の課題への対応が要求されている。これらを背景として平成 23 年度から、和歌山市を中心とした和歌山市圏域における将来の望むべき姿～「持続可能な都市像」＝グランドデザイン～づくりを目的として「和歌山市まちづくり戦略研究会」をスタートさせている。地域特性を活かしながら多くのひとが交流し「住んでよかった。来てよかった」といわれるまちづくりのビジョンを構築することが目標である。そのアプローチとして、さまざまな条件と課題を整理し、われわれが目指すべき方向性と和歌山市圏域のあるべきグランドデザインを関係各者の知見とアイディアにより描く。

2. 研究の概要

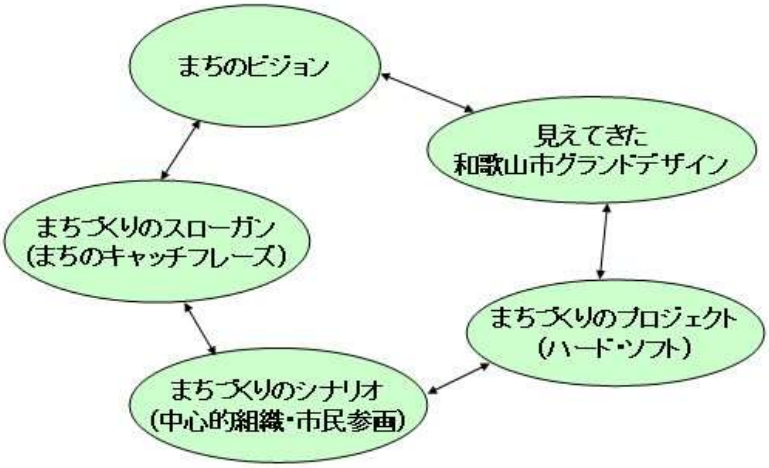
研究は平成 23 年度、24 年度の 2 ヵ年の計画で取組む。和歌山市圏域の現状と課題を十分整理しながら目指すべき将来像をさまざまな要素で統合し、最も和歌山らしい「まちのありよう」を構築する。目指すべきビジョンとイメージの一例を次に示す。

＜ビジョン＞
- 定住・交流人口の増加
- 地域活力復元（産業・コミュニティ・人材・文化等）
- 安全・安心できる生活空間（防災・医療・福祉・教育等）
- エコシティ（環境保護・交通体系）
- コンパクトシティ（都市機能効率化・拡散防止等
- 未来型土地利用計画（ゾーニング・モザイク）

＜イメージ＞


国土形成計画
・都市圏連携・交流・機能分担
・定住人口増加
・交流人口増加
・安全・安心できる都市空間
・エコシティ
・コンパクトシティ
―持続可能な都市構造―
＜和歌山グランドデザイン＞
・地域活力復元
・産官学+(専門機関)+(市民参画)
・未来型土地利用計画
定住自立圏構想

＜プロセス＞


まちのビジョン
見えてきた
和歌山市グランドデザイン
まちづくりのスローガン
(まちのキャッチフレーズ)
まちづくりのプロジェクト
(ハード・ソフト)
まちづくりのシナリオ
(中心的組織・市民参画)

3. 研究会メンバー

平成 23 年度研究会のメンバーは以下のとおり。

主査	木下　雅夫	(財)和歌山社会経済研究所	常務理事
	中山　健太	(財)和歌山社会経済研究所	研究部長
	中平　匡俊	(財)和歌山社会経済研究所	主任研究員
	松村　光一郎	(財)和歌山社会経済研究所	主任研究員
	大泉　英次	和歌山大学経済学部	教授
	足立　基浩	和歌山大学経済学部	教授
	鈴木　裕範	和歌山大学経済学部	准教授
	大井　達雄	和歌山大学観光学部	准教授
	山本　敦子	和歌山大学経済学部	助教
	中浴　正隆	和歌山商工会議所	主任
	中谷　恵理子	和歌山商工会議所	主事

（注：メンバーの所属・肩書については平成 23 年度時点）

なお、随時各界の有識者、専門家、学生のオブザーバーが参加している。

4. 開催実績

＃1　H23/04/22　・プレビュー

＃2　H23/06/08　・研究会の目的及び概要、スケジュール
＜豊田氏和歌山市企画部長／学生 3 名＞

＃3　H23/07/07　・「和歌山市における主要施設や交通不便地域の分布」
・「和歌山市の財政状況」・「和歌山商工会議所会員数の動向」
＜和歌山市議 2 名／糀谷氏 NPO 法人市民の力／学生 3 名＞

＃4　H23/09/16　・「少子化・高齢化社会における地方自治のあり方」
＜永尾氏（和歌山県）／川口氏（わかやま新報）／学生 2 名＞

＃5　H23/11/09　・「和歌山市都市計画マスタープラン」（和歌山市都市計画課 3 名）
＜永尾氏／糀谷氏／川口氏／志場氏（わかやま NPO センター）／学生 4 名＞

＃6　H23/12/14　・「縮小都市時代のまちづくり」
＜永尾氏／糀谷氏／志場氏／学生 4 名＞

＃7　H24/02/01　・「定住自立圏構想」
＜豊田氏／永尾氏／糀谷氏／志場氏／学生 1 名＞

＃8　H24/03/07　・「和歌山市の都市形成の歴史を考える」
＜糀谷氏／学生 2 名＞

＜＞はオブザーバー参加者

「和歌山市交通まちづくり研究会」終了報告

研究会主査 辻　本　　勝　久
【和歌山大学経済学部教授】

わが国の中枢・中核都市では、高齢化対策や交通安全対策、健康増進、地球温暖化対策といった社会的・環境的観点から公共交通の役割が再評価されている。また、和歌山市においては各種都市機能の郊外流出や、地域経済の低迷に伴う中心市街地の空洞化対策といった経済的課題も生じており、その解決に向けた交通システム面からの具体的検討と政策提示が求められる。

国内外では、富山市、ストラスブール（仏）、フライブルグ（独）など、和歌山市に類する規模の都市において、公共交通システムへの抜本的なテコ入れや、まちづくりと交通施策の連携を特色とした「交通まちづくり」が実施され、大きな成果を挙げている。

このような中で、本研究ではテーマを「和歌山市における幹線公共交通網の再構築とまちづくり関する研究」に設定して調査研究を進めた。また、交通施策はあるべき和歌山市の実現に向けた手段であるとの認識を明確にするため、本研究会を「和歌山市まちづくり戦略研究会」の分科会に位置づけることとした。

研究会は後述のメンバーと、多数のオブザーバーの参加のもとで進められた。日程と報告者・報告テーマは次の通りであり、その成果を活かして報告書が取りまとめられた。

［研究会　全 7 回］

・6 月 8 日

・研究会の進め方について

・辻本勝久「国内外の地方中核都市における交通まちづくりの事例　－ストラスブール、フライブルク、富山－」

・7 月 7 日

・汲田康太「岐阜市のバス交通を利用した交通まちづくり」

・9 月 16 日

・畑山善生「IC カードと街活性化　現状と今後」

・11 月 9 日

・汲田康太「広島視察報告」

・12 月 14 日

・田中喜行「公共事業のあり方について~マクロ経済成長モデル「貧困の罠」からの考察～」

・永尾吉賞「交通まちづくり研究会(提案)」

・中平匡俊「和歌山市の『新・幹線公共交通』」

・畑山善生、辻本勝久からも発言あり
・2 月 1 日
・中平匡俊「幹線道路への LRT 導入案」
・山本敦子「歩行空間のバリアフリー化」
・藤田和史「和歌山市の幹線交通網を構築する」
・3 月 7 日
・辻本勝久「和歌山市地域公共交通会議の取り組み状況について」

交通（移動）は、衣・食・住とならび、人々の生活の 4 大基礎条件と言えるものであるし、血のめぐりの善し悪しがひとの健康に直結するように、交通システムの善し悪しはまちの持続可能性（人や環境への優しさと経済活力）に直結する。

幹線公共交通の再構築をテーマとした本研究会はひとまず単年度限りで終了するが、次年度以降も時宜に即したテーマをその都度選定しながら「交通まちづくり」をコツコツと積み上げていくことで、持続可能な和歌山市づくりに貢献したい。

［研究会・執筆メンバー］（敬称は省略）

代表	辻本　勝久	和歌山大学経済学部教授
	大泉　英次	和歌山大学経済学部教授
	鈴木　裕範	和歌山大学経済学部准教授
	藤田　和史	和歌山大学経済学部講師
	山本　敦子	和歌山大学経済学部助教
	木下　雅夫	(財)和歌山社会経済研究所常務理事・事務局長
	中山　健太	(財)和歌山社会経済研究所研究部長
	畑山　善生	(財)和歌山社会経済研究所研究部長
	中平　匡俊	(財)和歌山社会経済研究所主任研究員
	松村　光一郎	(財)和歌山社会経済研究所主任研究員
	関本　禎孝	和歌山商工会議所企業支援部企画・街づくり支援室室長補佐
	中谷　恵理子	和歌山商工会議所企業支援部企画・街づくり支援室主事
	田中　喜行	神戸大学大学院経済学研究科院生
	汲田　康太	和歌山大学経済学部学生

（注：メンバーの所属・肩書については平成 23 年度時点）

［報告書］和歌山市のまちづくりと公共交通幹線の再構築

［執筆担当］（敬称は省略）

はじめに …… 木下　雅夫
第 1 部　公共交通幹線とハード施策

1. 戦略的交通基盤整備の重要性 ..... 田中　喜行
2. 地理情報システムを用いた和歌山市の幹線交通網構築への一提案 ..... 藤田　和史
3. トラム導入による観光都市「和歌山」への変貌 ..... 中平　匡俊
4. 歩行環境のバリアフリー化 ..... 山本　敦子
5. 和歌山市における LRT・BRT 導入の費用対効果分析実施案 ..... 辻本　勝久
第 2 部　公共交通幹線とソフト施策
6. 岐阜市のバスを中心とした交通まちづくり ..... 汲田　康太
7. 交通系ＩＣカードとまち活性化 ..... 畑山　善生

平成 24 年度事業

■研究事業

●　和歌山市まちづくり戦略研究

(平成 23 年度より継続、研究概要は P12 を参照)

【メンバー】

代表	木下　雅夫	(財)和歌山社会経済研究所常務理事
	大門　忠志	(財)和歌山社会経済研究所研究部長
	髙田　朋男	(財)和歌山社会経済研究所研究部長
	中平　匡俊	(財)和歌山社会経済研究所主任研究員
	髙木　啓江	(財)和歌山社会経済研究所主任研究員
	大泉　英次	和歌山大学経済学部教授
	足立　基浩	和歌山大学経済学部教授
	鈴木　裕範	和歌山大学経済学部教授
	中島　正博	和歌山大学経済学部准教授
	大井　達雄	和歌山大学観光学部准教授
	山本　敦子	和歌山大学経済学部助教
	中浴　正隆	和歌山商工会議所企業支援部企画・街づくり支援室主任

●　和歌山市のまちづくり戦略と都市間交通網に関する研究

【研究趣旨と目的】

和歌山市では、紀ノ川北岸に和歌山北インターチェンジができ、京奈和自動車や第二阪和国道の開通も予定されているなど、高規格道路網が発達してきており、域外からの観光需要等の獲得や、高速バス路線網の発達等が期待される一方で、買い物客等の他地域への流出傾向がさらに強まる懸念もある。

また、和歌山市には南海本線、JR 阪和線、JR 紀勢本線、JR 和歌山線等の都市間鉄道路線や、四国を結ぶ南海フェリーがあり、大きな社会的役割を果たしている。とりわけ JR 和歌山駅等の主要駅とその周辺の都市機能集積には、コンパクトなまちの中心核としての役割や、観光軸などのハブとしての機能、大阪に流出しようとする県内買い物客をせき止める機能等が期待できる。一方で鉄道・フェリーの利用者数は減少傾向にあり、鉄道の所要時間が延びる傾向にあるなどの問題も抱えている。

さらに、泉州沖には 24 時間オープンの関西空港があって、LCC 拠点化等の新たな展開がなされており、これを活用したインバウンド旅客の獲得等の地域戦略が期待される。

このように和歌山市を取り巻く都市間交通網に様々な変容が見られ、期待と懸念が交錯する中、本研究では「和歌山市まちづくり戦略研究会」での議論を踏まえつつ、あるべき和歌山市の実現に向けた都市間交通網の活用方策や改善方策について考えたい。

研究期間は 3 年間である。1 年目には鉄道・フェリー網、2 年目には航空網、3 年目には高規格道路網を扱う予定であるが、この順番については研究会の中で決めていきたい。鉄道・フェリー、航空、道路の研究を同時並行で進めることもあり得る。

【メンバー】

代表	辻本　勝久	和歌山大学経済学部教授
	藤田　和史	和歌山大学経済学部講師
	廣岡　裕一	和歌山大学観光学部教授
	山本　敦子	和歌山大学経済学部助教
	木下　雅夫	(財)和歌山社会経済研究所常務理事
	大門　忠志	(財)和歌山社会経済研究所研究部長
	畑山　善生	(財)和歌山社会経済研究所研究部長
	中平　匡俊	(財)和歌山社会経済研究所主任研究員
	山下　光之助	(財)和歌山社会経済研究所主任研究員
	青木　勇次	和歌山商工会議所企業支援部企画・街づくり支援室主任

■刊行物

- 機関誌「地域経済」
- 報告書

■ホームページによる広報

平成 24 年 5 月にホームページをリニューアルしました。

URL: http://www.eco.wakayama-u.ac.jp/wtkkk/

【リニューアルホームページイメージ】

理事メンバー

（平成 24 年 7 月 1 日現在）

【和歌山地域経済研究機構理事】

理事長	遠藤　史	和歌山大学経済学部教授　経済学部長
副理事長	山田　良治	和歌山大学観光学部教授　観光学部長
理事	岡本　賢司	和歌山商工会議所　専務理事
	北田　佳秀	(財)和歌山社会経済研究所　副理事長
	木下　雅夫	(財)和歌山社会経済研究所　常務理事
	石橋　貞男	和歌山大学経済学部教授
	鈴木　裕範	和歌山大学経済学部教授

研究成果一覧

ナンバー	タイトル	発行年月
No.1-a	提言　紀淡連絡道路を実現し和歌山地域の活性化をはかるためのグランドデザイン	平成 10 年 8 月
No.1-b	提言　このチャンスを活かそう　紀淡連絡道路を実現し和歌山地域の活性化（グランドデザイン概要版）	平成 10 年 8 月
No.2	ニーズの多様化と規制緩和の進展に伴う経営戦略－和歌山企業の活性化を目指して－	平成 10 年 9 月
No.3	和歌山地域産業の市場構造	平成 10 年 10 月
No.4	和歌山市民・近隣地域住民の消費動向と和歌山市小売商業の課題	平成 11 年 11 月
No.5	和歌山市の高次都市機能	平成 11 年 11 月
No.6	和歌山県における産業構造の変化と雇用動向	平成 12 年 3 月
No.7	若者に魅力ある街づくり	平成 13 年 6 月
No.8	ベンチャービジネス事例研究	平成 14 年 6 月
No.9	IT 活用による生活向上の可能性	平成 15 年 5 月
No.10	和歌山県の物流戦略	平成 15 年 9 月
No.11	和歌山県におけるカジノの可能性に関する調査・研究報告書	平成 16 年 12 月
No.12	観光戦略研究会調査・研究報告書	平成 17 年 3 月
No.13	都市創造戦略研究会調査報告書	平成 18 年 10 月
No.14	和歌山における地場産業の実態と将来動向に関する研究会	平成 19 年 3 月
No.15	建設業の動向に関する研究会報告書	平成 19 年 11 月
No.16	コンパクトシティ研究会報告書『コンパクトシティと都市づくり』	平成 20 年 9 月
No.17	ホスピタリティ研究会報告書	平成 21 年 9 月
No.18	和歌山市民・近隣地域住民の消費動向と和歌山市小売商業の課題	平成 22 年 3 月
No.19	和歌山市における市場（いちば）活性化についての研究	平成 22 年 3 月
No.20	観光客の受け入れに対する和歌山県民の意識調査	平成 22 年 3 月
No.21	ぶらくり丁活性化・再生研究会報告書　和歌山市中心市街地活性化における中心商業地の問題	平成 23 年 3 月
No.22	わかやま散策マップ	平成 23 年 3 月
No.23	和歌山市のまちづくりと公共交通幹線の再構築	平成 24 年 3 月

和歌山地域経済研究機構

<構成機関>和歌山大学経済学部・観光学部　和歌山商工会議所　(財)和歌山社会経済研究所
〒640-8567 和歌山市西汀丁36 和歌山商工会議所内
TEL:073-422-1111 FAX:073-433-0543

Designed by Kazuya Horikirikawa